

平成22年5月28日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19300211

研究課題名（和文）スポーツにおける人間の生の経験とそれを重視した体育における人間形成に関する研究

研究課題名（英文）Experience of the life of human beings in sport and the character building in physical education attaching great importance to it

研究代表者

畑 孝幸 (HATA TAKAYUKI)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：00156322

研究成果の概要（和文）：本研究では、「心と体」の問題が人間的な存在への問いと不可分であるという認識に立ち、スポーツにおける人間の生の経験とスポーツを教材とする体育における人間形成の可能性を検討した。平成19年度は「心と体」の問題は自己自身の存在への問いと不可分であるという知見を得た。平成20年度はスポーツにおける自己の達成は他者との連帯に発展する可能性を秘めていることを授業実践において実証した。平成21年度はスポーツにおける自己の達成は他者との連帯に発展することを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, from the viewpoint that the issues of mind/body and the questions of self existence are inseparably related, living experience of human beings in sport was considered and the possibility of character building in physical education which assumes sport a teaching material was examined. We found out, in the fiscal year of 2007-2008, that issues of mind/body and the questions of self existence were inseparably related to each other. It was showed, in the fiscal year of 2008-2009, that the self-performance or self-achievement in sport had a possibility to develop the solidarity with others upon investigations in several classes of general physical education in higher education. In the fiscal year of 2009-2010, we continued to investigate the issues of self-performance and self-achievement in sport and the solidarity with others, and found that they developed the solidarity with others.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	4,300,000	1,290,000	5,590,000

研究分野：体育・スポーツ哲学、体育・スポーツ教育学

科研費の分科・細目：身体教育学

キーワード：スポーツ、体育、人間形成、哲学的人間学、人間の生の経験、身体性哲学  
コミュニケーション、国際情報交換

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究課題の申請時における背景の一つに、学校教育の現場では、「いじめ」「不登校」「校内暴力」「非行」「学級崩壊」といった現象について、出口の見えない難問が山積みしていたことがあげられる。「いじめ」や「暴力」が原因で児童・生徒たちが死に追いやられる悲惨な事件が絶えない状況下で、児童・生徒は、自らの学びを阻害され、「生きる力」を耕せない状況にあった。当時の教育の荒廃の背後にある「心と体の問題」に対処すべく学習指導要領が改訂され、体育においても「心と体の密接な関連」という理念を追求することによって、児童・生徒が直面する問題状況の打破に貢献しようとした。そして「多くの問題に直面する児童・生徒に対して体育は何ができるのか」、「公教育としての体育の教育責任とは何か」ということが強く問われることになった。しかし例えば、何をどう指導すれば「心身の関連」という理念を実現できるのかということについて、実際の授業における具体的な実践の場面では戸惑いもあった。また、学習指導要領にある「心と体を一体として捉える」ということや、「自分や仲間の体や心の状態に気付く」ということも、「捉える」「気付く」ということの哲学的問題の検討が不十分なままに残されていた。こういう問題を検討し、公教育としての体育は多くの問題に直面する児童・生徒に対して何ができるのか、そうした素朴な疑問に答えてみたいというのが本研究の動機であった。

(2) これまで体育は、その時々々の社会的要請を受け入れながら、何がしかの人間形成を行ってきた。わが国でも、スポーツの人格形成の可能性に着目して、それを体育に適用しようとした試みが早くからあった。そのなかには、体育で目指すべき人間像として、心身の調和の取れた徳を身につけた人間を描いているものもある（島田，1926）。最近の欧米では、児童・生徒の人格形成という総合的な視点からみても明確な方法論を備えた体育論の再構築が行われている。なかでも、倫理学や道徳教育を参照しながら、スポーツと人

間とのダイナミックな関係構造におけるスポーツの価値について考察し、体育における人間形成の可能性について行われた研究は注目に値する（Arnold, 1997）。しかしながら、スポーツにおける人間の生の経験と人間形成の可能性については、わが国と欧米の双方において検討が行われていない。スポーツが人間の生の経験に対して持つ意味を追求した研究として高い評価を受けているものには、スポーツを含む人間の生の経験と達成についての哲学的人間学からの研究（Lenk, 1983, 1985, 2002）や、それに影響を受けた研究（Sekine & Hata, 2004）などがある。こうした研究が本研究の背景にあった。本研究では、上述した研究をはじめとする諸研究の成果を発展させて、学術的にも画期的で独創的なものを志向し、哲学的人間学という新しい視点から新たな体育論を模索しようとした。そこには、スポーツなどの運動技能の習得や倫理規範の教育を中心としてきた従来の体育論を超越し、新たな体育論を示そうとする意図があった。

## 2. 研究の目的

本研究課題の申請時における当初の研究目的は以下に示すとおりである。スポーツを教材とする体育でなければなしえない人間形成の意義を再確認するためには、「心と体」の問題が児童・生徒の人間的な存在への問いと不可分であるという認識が、当初われわれにはあった。そこでわれわれは、スポーツにおける人間の生の経験について考察し、スポーツを教材とする体育における人間形成の可能性について検討しようとした。具体的には、スポーツにおける「他者との交流」や指導者や仲間との「コミュニケーション」から得られる人間の多様な生の経験を、体育に取り込もうとした。体育はスポーツや運動を教材とする人間形成の営みであり、それだからこそ児童・生徒が直面する「心と体の問題」の解決に向けて貢献できるのだという観点から、「スポーツと人間の生の経験」「スポーツの教育的価値」「体育における人間形成」について考察しようとした。

### 3. 研究の方法

本研究は3年の期間を設けて行った。その際に5つの研究課題（以下に示す○囲み数字の課題）を設定した。1年目の平成19年度は、体育における「心と体を一体として捉える」「自分や仲間の体や心の状態に気付く」ということについての哲学的考察を進めた。すなわち、①「心身を一体として捉える」とはどのようなことか、②「体や心への気付き」とは何か、ということについて明らかにしようとした。2年目の平成20年度は、スポーツにおける人間の生の経験とスポーツの教育的価値について、哲学的人間学の立場から研究を進めた。すなわち、③他者との交流を必然とするスポーツにおける人間の生の経験とは何か、④「生きる力」を育む体育におけるスポーツによる人間形成の可能性ということを明らかにしようとした。3年目の平成21年度は、「いじめ」や「非行」の被害に直面する児童・生徒に対して体育は何ができるのかということ、すなわち、⑤体育でなければ成しえない人間形成の意義を明らかにしようとした。

### 4. 研究成果

(1) スポーツはグローバルな現象であり人間にとって文化を超えた価値を有する実践である。このようなスポーツに対する考え方は世界のどの地域でも普遍的に当てはまる。こういう意味でスポーツという実践は倫理的諸原則や道徳的諸価値と無関係ではない。したがってスポーツは、普遍的な視点から教育的な営みとして正当化される。教育的な営みとして行われるスポーツは、それに付随する外在的な価値や目的ではなく、内在的価値を目指して行われなければならないということである。学校における体育は、時代とともに社会的ニーズを受け入れながら、身体運動を含むスポーツを教材として人間形成に努めてきた。わが国でも西洋でも、体育では心と体のバランスが取れた人間を育てることが理想だと考えられてきたことが明らかになった。

(2) スポーツは人間の存在にとって不可欠な実践である。スポーツが人間の生に対して持つ意味の一つに自己の達成への志向がある。人間の生は自己に関わる事柄のみで構成されるのではない。それは他者との関係からも構成される。スポーツにおける人間存在への問いは心身の問題と密接に関係していることが再確認された。人間の存在にとって不可欠な実践であるスポーツによって人間形成を行うことは否定できないということが

明らかになった。

(3) 体育において「心と体を一体として捉える」こと、「自分や仲間の体や心の状態に気付く」ということには、コミュニケーションと深く関わっている。体育では他者との交流を必然とするスポーツが教材となる。そういうスポーツにおける人間の生の経験を重視した体育は、他者について配慮したり、その身体について注意を払ったり、様々な事柄を生かしながら人間形成を図ることが出来る可能性を秘めている。

(4) 「生きる力」を育む体育でのスポーツによる人間形成の可能性について考察した。その結果スポーツにおける人間の生の経験が体育においてどのような意義を持ち得るのかをある程度明らかにすることができた。また、「いじめ」や「非行」の被害に直面する児童・生徒に対して体育は何ができるのだろうか。児童・生徒の身体の教育を重視することとは心の解放につながる。これは体育でなければ成しえない人間形成の意義の一だということが明らかになった。

(5) スポーツが人間の生に対して持つ意味の一つに自己の達成への志向がある。人間の生は自己に関わる事柄のみで構成されるのではない。それは他者との関係からも構成される。スポーツにおける他者の問題を社会哲学的観点から吟味し、スポーツでの自己の達成が他者との連帯に展開するということが明らかにした。それは、体育において、他者を思いやる、他者の身体に配慮する、それが出来る自らの身体を作る、そういうことを体験することによって可能だということが示唆された。

(6) スポーツにおけるコミュニケーションモデルとしての指導者とプレーヤーの自他関係は立場の違いを止揚する関係である。スポーツを実践するグループにおけるコミュニケーションは自他の連帯と達成へ向けての身体的行為によって可能になる。これは、体育では集団によって具体化される共通の意味の存在と、その具体化に向けての身体的行為の存在が重要であり、勝敗の意味や集団での達成を学習の目的とするスポーツ教材が、他者理解のためのコミュニケーションを提供するものへと生まれ変わる可能性があることを示唆している。

(7) この研究課題によって得られた成果の一部は、「5. 主な発表論文等」に示したように国内外で発表し、その結果、多くの注意を引いたと思われる。今回の研究課題では当初設定された目的が十分に達成されたとは言

いがたい部分もある。特に、スポーツ実践における人間の生の経験とは何かということは、今後も詳細な検討を重ねて、明らかにしなければならない。これは本研究が発展するための今後の展望として残されている。また、身体教育の意義について再確認しなければならないこと、身体教育と人間形成の関係についてより深く考察することなどが、今後の課題としてあげられる。

#### 文献

- Arnold, P. (1997). Sport, Ethics and Education. Cassel
- Lenk, H. (1983). Eigenleistung. Edition Interfrom
- Lenk, H. (1985). Die achte Kunst. Edition Interfrom
- Lenk, H. (2002). Erfolg oder Fairness?. Lit
- Sekine, M. & Hata, T. (2004). The crisis of modern sport and the dimension of achievement for its conquest. International Journal of Sport and Health Science. 2, pp.180-186
- 島田正蔵. (1926). 體育原論. 大同館書店

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① Hata, T. and Sekine, M. (2009). Olympic education as an international relation of the third degree. Physical Culture and Sport Studies and Research. 157, pp.103-111(査読有)
- ② 関根正美. (2009). 西洋古典におけるスポーツ哲学. 岡山大学教育学研究科研究集録. 142, pp.85-91(査読有)
- ③ 関根正美. (2008). 遊戯としての身体運動における経験. 体育・スポーツ哲学研究. 30(2), pp.99-111(査読有)
- ④ 関根正美. (2008). 金メダリストの哲学者一達成と静謐. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録. 139, pp.121-127(査読有)

[学会発表] (計7件)

- ① Sekine, M. and Hata, T. Philosophy of Japanese rugby: Tetsunosuke Onishi's 'fighting

ethics' in rugby. British Philosophy of Sport Association (6th Conference). March 26, 2010. Cardiff, UK

- ② Hata, T. and Sekine, M. The birth of the philosophy of sport in Japan and its development. International Society for the Social Science of Sport (1st Conference). September 26, 2009. Warsaw, Poland
- ③ Sekine, M. and Hata, T. Establishment and development on the philosophy of sport in Japan. International Association for the Philosophy of Sport (37th Conference). August 29, 2009. Seattle, USA
- ④ Hata, T. Human relation to body and the dimension of achievement in sport and physical activity. British Philosophy of Sport Association (5th Conference). March 2009, 27. Dundee, UK
- ⑤ Sekine, M. Individual training and athletics: A way to form of self. British Philosophy of Sport Association (5th Conference). March 27, 2009. Dundee, UK
- ⑥ Sekine, M. and Hata, T. Modern sport as an opportunity to form a sense of self. World Congress of Philosophy (22nd Conference). August 1, 2008. Seoul, Korea
- ⑦ Hata, T. and Sekine, M. The meaning of sport and the character building in physical education. International Association for the Philosophy of Sport (35th Conference). September 19, 2007. Ljubljana, Slovenia

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

畑 孝幸 (HATA TAKAYUKI)  
長崎大学・教育学部・教授  
研究者番号：00156331

##### (2) 研究分担者

関根 正美 (SEKINE MASAMI)  
岡山大学・教育学部・教授  
研究者番号：50294393

##### (3) 研究協力者 (海外共同研究者)

ハンス レンク (HANS LENK)  
カールスルーエ大学名誉教授

